平成５年１月１２日発行

鵠沼

久　久　比　奴　末

はまゆう　と　櫻貝　と
海光る　わが　故里

第　６　６　号

内容　　鵠沼の思い出　　若尾　肇

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保２年・1801）で、”くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。

『鵠沼の思い出』

この文章は、現在、葉山にお住まいの若尾　肇さんの筆になるものです。若尾さんは、昭和５年に、鵠沼小学校に入学して後、湘南中学校から当時の海軍兵学校に進み、やがて終戦を迎えた経験の持ち主です。その小学校時代の「鵠沼の思い出」綴ったものが、本文です。昭和の初期の人々と風物が生き生きと描写されていて、それと、現在の世相をちょっぴり批判した内容もあり、ご本人の承諾を得て当会の機関紙紙「鵠沼」に収録させていただきました。なお、目次がわりに、各項目を列記しますと、

Ⅰ．　鵠沼小学校の思い出・・概要、先生の顔触れ、生徒の風俗、入学式、天長節、運動会、・・以上66号。・・学芸会、遠足、海水浴とその歌、唱歌の時間、読み方の時間、ある昼休み。

Ⅱ．　昭和一桁時代・・オトメさんの家、堰、当時の風俗、おこじょ、こがし、竹の子の皮、愛読書、農家の作り、尼寺さん。・・この項は66号。

Ⅲ．　鵠沼風物詩・・木登り、涼し場、おんじょけ、「がしゃ」捕り、宝探し、栗拾い、餅つき、お正月、稲荷講、凧揚げ、引地川、活動写真、紙芝居。

Ⅳ．　堀川の思い出・・神明様のお祭り、堀川というところ、葉山さんの家。

〔注〕 この文章は「鵠沼」第６６号及び第６７号に連載いたします。

はじめに

人間は、偉大な恩恵を被っているときは、とかくそれを忘れがちになる。今にして思えば、私たちは現代の子供達よりもはるかに幸せであった。

それは、物質に代えられない、自然の恵みをうけた子供時代があったからだ。それゆえ貧乏ではあったが、人々の心は今のようにあくせくしておらず、暖かみがあった。

これらが大きく崩れた原因は、利権企業と人間のエゴとが、無秩序な一極集中を生み出し、文化の伝統を持たない寄り合い所帯的な大型宅造によって、自然という偉大な教育者を次々に疎外し、政治家を政治屋たらしめてその指導力を失わせたことにある。

鵠沼小学校について

学校の概要

当時の鵠沼小学校は、農村の自然の恩恵を満喫させてもらえる環境であった。学校を一歩出れば、藁葺屋根の点在する田園風景であり、数多い生物たちとの共同生活の場でもあった。そこで、思い出すままに、当時の学校を振り返ってみよう。

南側に正門があり、その正面には木造平家建ての校舎の玄関、左側は順に校長室、職員室、青年学校の教室と並び、数米離れて一年生の教室が縦に並んで、西側の廊下でつながり、渡り廊下を渡って、西に二年生の教室がやはり縦に並んでおり、三年以上の教室は更に西側の敷地の端に縦（南北）にずらりと並んでいた。玄関の東側には、畳敷の裁縫室があり、東端も敷地に沿って高等科の教室が南に真直ぐ伸びていた。この教室は、卒業式や四大節のときには間仕切りを打ち抜いて、式場にしたり、学芸会の会場にもなった。

裏門は北側にあって、そこから真直ぐ北に進むと、東海道線の踏み切りがあった。道路は敷地の回りを、北、西、南と三方を囲んでいて、西側と南の一部には敷地に沿って小さな流れがあり、めだか、どじょう、げんごろう、水すまし、あめんぼうなどが楽しげに泳ぎ回っていた。

周囲の店としては、西側に三留さん、南東に小川さん、少し離れて南西にキンちゃんの

店があり、文房具は三留さん、小川さん、メンコ、コマ、タコ、ラムネの玉等はキンちゃんの店で買っていた。

正門の東側は、道路に沿って桜の大木が数本植えてあり、入学式の頃は花が美しく咲き乱れていたが、葉が出始めると『ジンジンゲムシ』と呼んでいた、毛が長くてセカセカ歩く毛虫がたくさんついて、下を通ると、よく上から落ちてきて閉口したものだ。正門を入るとすぐ右には、吸い上げポンプの付いた井戸と、洗い場があり、休み時間等には、駆逐水雷や鬼ごっこをして喉の渇いた生徒たちが一列に並び、交代でポンプをガチャコン押すと次々にトタン製の水の出口に口をつけて、やや臭みのある水をがぶがぶ飲んだものである。臭みはあったが、渇いた喉には実においしかった。

校門を入って左側には、間もなく御神影の奉安殿ができ、我々がその前を通るときは、それに向かって最敬礼をしなければならなくなった。今から思えば、ウイリヤム・テルの帽子のようものであった。

東側の教室からは、高等科の生徒たちが「ア・サーヒハ・ノ・ボーリヌ・ヒ・ワーイーデヌー・・・」とどら声を張り上げて歌っており、低学年の者には随分と大人に見えたものだ。（私が入学したときは『鵠沼尋常高等小学校』であったが、間も無く高等小学校が別にできて、『鵠沼尋常小学校』と名称が変わった）

校庭は二百米コースがやっと取れる程度であったが、先生の話によれば、都会の学校から見れば、羨ましがられるような広さであったという。小使い室は一番北側で、職員室から廊下を隔てて飛び出した形になっており、人の良さそうな小使さん夫婦が住んでいて、広い炊事場には大きな『やかん』が学級の数だけ置いてあって、昼弁当の時、当番がその『やかん』を受取りに行くことになっていた。

先生の顔触れ

職員は、土方校長先生を初めとして、白井先生、池田先生、鈴木晴雄先生、遠藤先生、桜本先生、関根肇太郎先生、八幡先生、山田先生、関根先生（別名お山の先生、＝神明様の宮司をしていた）などが男の先生で、女の先生は、安田先生、島村先生などが私の入学時に居られ、その後男の先生では武藤先生、土屋先生が転入され、女の先生では、三川先

生、亀井先生などが来られた。私が四年生の時、土方先生は藤沢小学校校長に栄転、代わって坂倉校長先生が鎌倉から転任された。一年の担任だった関根肇太郎先生は、人間味のあふれる素朴なよい先生であり、二年から六年までずっと持ち上がり担任であった八幡先生は、師範出のばりばりの若手先生として、使命感に燃えておられた。そのほか、にじむような人間味を感じさせた遠藤先生、桜本先生、お山の先生、どの先生を取り上げても、当節のサラリーマン的教師とは、一味も二味も違うおおらかさと、人間臭さがあった。

父兄会長の高松さんは、立派な髭を生やした土地の名士で、我々子供から見るとすごく偉い人に見えた。校医はその息子さんだったが、その三男が私より二級年上であったからかなりの年配で、ちょび髭を生やした話好きのお医者さんだった。私も、この先生には大変お世話になり、往診して頂いたこともしばしばあるが、父や母と話が弾んでくると、聴診器を掛けたまま患者そっちのけで身振り手振りで話すしぐさが面白く、私も何度か吹き出して病気を忘れてしまうことが多かった。また、とてもお人好しで損をした先生でもあった。というのは、農家への往診を嫌がる先生の多かった中で、この先生は気軽に往診してくれるので、ほかの医者がさじを投げて往診を拒んだ時も、気軽に出掛けてあげたようだが、その時はもう手遅れで間に合わないことも多かった。そのため、「あの先生は患者を殺す」とか、「藪医者だ」などと陰口をたたかれることがあり、子供心に気の毒だなあと思った。

生徒の風俗

生徒の服装も、絣の着物が大半で、右の袖は黒光りしていたが、当時は鼻炎の子が多くしょっちゅう右の袖で鼻汁を拭いていたためであった。今は鼻を垂らす子共はほとんど見掛けないが、医療の不十分な当時は、花粉症などは治療もせずにやりっ放されていたためであろう。さらに、頭に『カサカキ』の子もかなり多かったが、これは今から思うと、入浴を殆どせず不潔であった者と、親からの遺伝性梅毒と二種類あったようだ。女の子の中にも毛髪に『毛じらみ』のついた『フケ』だらけの子も居たようだ。

生徒の使う言葉は、男子はおおむね『田舎言葉』であったが、なぜか女子は私が入学した頃から次第によくなって、会話だけを聞いていると「どこのお嬢様かな」と思われる

ような言葉使いに代わっていつた。男子は「よお、おめえよお、こんだの日曜はよお、はめーいくべよー」（浜へ行こうよ）「おらがんとかあよう、おとっちゃんも、おっかちゃんもよう、うるせーからよう、のらーてつだーねーと　ようひっぱたかれんからよう、いけんか　どーかわかんねーや」（俺の家は、父も母もうるさくて、野良を手伝わないと殴れるから行けるかどうか分からぬ）という調子だが、女子になると、

「ねぇ、今度の日曜にお天気だったら、浜にゆきましょうよ」「あたしの家はね、お父さんもお母さんも、とてもうるさくて、あたしが野良を手伝わないと、叱られるのよ。だから行けるかどうか分からないわ。」という具合で、男女の言葉のアンバランスがひどかった。だが、このような女子のことばも家に帰ると、がらりと田舎言葉に戻る人もいたようだ。誠に不思議な現象であったが、それを裏付けるように、坂倉校長先生が着任して間も無く、朝礼の時、全校生徒に「この学校に着任して感じたことは、女生徒の言葉が実にきれいなことです。都会の言葉と比べて少しも恥ずかしくありません。それに比べて、男子の言葉使いは悪いですね。女子が良い言葉を使っているのに、男子が『いえー、おめーえ』（笑声）なんていうのはみっともないでしょう」

この現象は、当時ぼつぼつ都会からの転校生が入るようになってきて、女子の中にその言葉を真似る者が増えてきたからと思われる。

次に子供の買い物である。男子の場合は、店の戸を勢いよくがらっと開けて、「おくれーいっ」と威勢よくいうと、中から叔母さんが出てきて「はーい、なあに」と答える。欲しいものを探して「これくんな」と言うと「はい、これ二銭ね、ありがと」これが女子になると、かわいい声で、「チョーダイナ」または「クダサイナ」と言って店に入る。

当時は、買い物といっても一銭とか二銭持って買いに行く場合が多かったようだ。それでも、欲しい物が手に入ると、満足そうににこにこして店を出てくるものがが多かった。貧乏のほうが、「足るを知る」という心が強かったと断言できる。

ともあれ、世界有数の金持国になった現在の方が、心貧しき者が激増していることは、何とも皮肉なことであり、政治屋たちに「経済成長とは何なのかい」と問い質したい。

入　学　式

幼稚園に行かなかった私にとつて、小学校に行くことは、期待よりも不安の方が大きかった。母に連れられて校門をくぐった時、正面の木造校舎の玄関が、どっしりした風格で私を呑み込むように思えたものだ。十名以上の新入生がもう来ていたが、皆、金ぴかの記章をつけた真新しい帽子に絣の着物という恰好で、金ボタンに半ズボンという洋服姿は少なかった。ある者は、喜々として校庭を跳びはねており、またある者は私と同じ心境なのか、母親の袖をしっかり摑んで不安そうに顔をこわばらしていた。

母は早速、来合わせた誰かの母親と挨拶をかわし、その母親についてきた子を私に引き合わせ、「三留輝雄さんよ。一緒に遊んでらっしゃい」と言った。これが、私の最初に知り合った同級生である。

私は何となくちぐはぐな気持ちで、おどおどと彼について歩いたが、兄弟のない私が、三留君よりはるかに緊張感が強かったようである。真先に緊張をほぐしてくれたのは、大橋実君だった。彼は「飛行機だ。ぶるるーん」と言いながら、両手を広げ体を傾けて走り寄り、にこっと笑って「一緒にやらないか」と言わんばかりに遠ざかっていった。子供同志が打ち解けるのは、いとも簡単だ。こんな単純なきっかけで緊張がほぐれた私は、三留君と共に飛行機ごっこに興じていた。すると、今度は棒切れをかついだ小林正志君が「鉄砲かついだ兵隊さん、足並揃えて歩いている・・・・・」と歌いながらひょこひょこ歩き始めた。我々はすぐその仲間に入り、一列になって、とっとことっとこ歩いてた。

突然「からんからんからん・・・」鐘が鳴った。見ると小使いさんが、玄関のポーチで鐘を振っている。私達は母親に付き添われて朝礼台の前に並んだ。「さあ、今日からはもう小学生ですから、お母さん方はお子さんから離れてください」関根肇太郎先生がにこやかに呼びかけられた。島村先生や安田先生も微笑みをたたえ、我々が雰囲気に溶け込めるように努めておられたようだ。誰か半べそをかいて母親のたもとにしがみ付き、引き離すのに困りきった表情の人もいたが、やがて生徒だけの整列となった。関根先生は朝礼台に立って、「これからこの校舎の説明をします。みんな右の方を向いてごらん。そーおみんな向けましたね。お母さん方、今年のお子さんはお利口ですよ。ちゃーんと右を向けるんですから」母親たちは半ばてれくさそうに、でも嬉しそうにどっと笑いどよめく。これで

全体の空気はぐっと和やいだ。それでも、土方先生は、私にはとても謹厳な、偉い人に見え、関根先生は暖か味のある優しい小父さんという感じで、ほっとしたような気持ちになれた。

今でいうオリエンテーションが終わり、教室に入ることになった。怖がった生徒がいきなり母親の袖にしがみついた。「来てはだめだったら」母親は困惑して叱るが、頑として離れない。関根先生が笑いながら「さ、先生と行こう」と言って足をばたつかせている子をいとも簡単に抱き上げ連れていった。誰かが、「あっ、本屋さんだ」と叫ぶと、皆、口々に「本屋さん、本屋さん」と真似る。鉛筆を耳に挟んだ川上の小父さんが「小学国語読本」をたくさん抱えてにこにこしながら私達の前を通り過ぎる。一瞬、新しい教科書独特の印刷インクの香りがぷーんと鼻をかすめ、ぴっかぴっかの一年生になったとの実感に酔ったっけ。

天　長　節

四月二十九日、この日は、天皇誕生をお祝いする式典で授業はない。当時は「天皇がお生まれ遊ばした日」と言わねばならず、「天皇が生まれた」等言おうものなら、「そんな言葉を使うと、不敬罪で警察に引っ張られんから」と言われたものだ。でも中には、「天皇はいいよなあ。うめえ物たらふく食ってよう、ご殿に住んでよう、威張ってりゃあいいだからよう。」と言う者もいたが、そんな時むきになって「ばーか、何も知らねえだなぁおめえは、日本人で一番てえへんなのは天皇陛下だぜえ。式があんときゃあ二時間も三時間も気を付けのまんまでよお、小便もできねえだぞお。きしぇ（ちぇっという舌打ち）わかっちぁねえんだから」と反論する者もいた。

この日は全員晴れ着で登校だ。男子は殆ど絣の着物にチャコール袴、女子はえんじっぽい赤の袴に、頭には大きなリボンをつけて嬉しそうだ。洋服に止め金のついた靴をはいた子は「おでえじん（金持ち）」の子といわれ数少なかった。（藤永文義君がそうだった）

授業がないので、皆晴れ晴れした顔で校庭で遊んでいる。遊びは、男子は主として部落対抗の「駆逐水雷」である。高等科の生徒が大将になり、「お前は駆逐、お前は水雷」と役を決める。駆逐は水雷より強く、大将は駆逐に勝つが水雷には弱い。同じ役柄の敵とは

「がっちゃ」という頭の押さえっこして、負けると捕えられて「ねんき（年期？）」になる。水雷は駆逐に触られるだけで「ねんき」にされるから、水雷にされるのを嫌がった。私はちょこちょこしていてひ弱だったのでいつも水雷にされてしまった。「よし、強い者になろう」これが私が軍人志向の一因ともなった。同級生同志でやる時は、「くーちくすーらいすーるものよーっといで」と発起人数名が腕を組んで歩き始めると、我も我もと集まり大集団になると、二人ずつじゃんけんをし、「かぁち、かぁち」。「まぁけ、まぁけ」と言いながら勝組と負組に分かれる。このとき大将になるのは、渡辺政治、有田清彦の両君にきまっていた。

一方、女子の遊びは、「花いちもんめ」「お手玉」「まりつき」「なわとび」等で、それぞれの童歌があちこちから聞こえてきた。「勝あって嬉しい花いーちもーんめ、負あけてくやしい花いちもんめ」「なーけよ、うーぐいすほーほけきょと我が家の庭をー」「いーちれーつらんぱんはれっして、日露戦争が始まった。さっさと逃げるはロシヤ兵、死んでも尽くすは日本の兵、五万の兵を引き連れてー」「お嬢様おはいりー、はいよろしう、じゃんけんぽんよ、負けた方はお逃げなさい」こんな声が賑やかにあちこちから、或いは高く或いは低く聞こえていた。

閑話休題、朝礼後、教室に入り、クラス毎に整列して式場に入る。式場は東側の高等科の教室を四つぶち抜いて、全校生徒が入れるようにしたものだ。先生方は、校長をはじめモーニングに白手袋、女の先生は紫紺の袴だったように覚えている。司会の鈴木先生の、さびのあるだみ声が荘重に開会を宣言すると、廊下からこっこっと靴の音が聞こえ、白井先生がお勅語の納った桐の箱を紫のふくさに包んだものをうやうやしく押しいただいた形で左手より入場、校長に捧げ渡す。校長先生は一礼して奉読を始める。「朕推ふに我皇祖皇宗国を肇むること宏遠に得を樹つるところ深厚なり。我臣民克く忠に克く孝に・・・・」と重々しく読み始めると生徒一同頭を垂れて神妙に聞く。この時の土方校長の声は、私には「忠誠心のかたまりの人」のように響いた。続いて、関根先生のタクトにより君が代斉唱、終わって校長先生から「陛下におかせられましては・・・」とありがたいお話。この時は「早くおわってくれないかな」なんて不遜なことを心に思いつつ一生懸命謹聴していた。最後に歌う天長節の歌は「これで後はのびのび遊べるんだ」という解放感で晴れ晴

れした気持ちになり、声高らかに歌ったものだ。

今日の佳き日は大君の　　生まれ給ひし佳き日なり

今日の佳き日は御光の　　さし出給ひし佳き日なり

父兄会長高松さんの髭も、この時ばかりは柔和に綻んで見え、友だちと思いっきり遊べるという楽しさで、正に仕合わせ一杯という実感を持った一時であった。

運　動　会

ドーン、パァーン、パパーン、パチパチパチ・・・・・打ち上げ花火が朝の静寂を破って鵠沼の空を震わせた。今日は予定通り運動会がありますよ、との合図である。生徒達は喜び勇んで「腕抜き」と呼ばれる純白のランニングにパンツ、運動足袋という運動会用の白足袋といういでたちでいそいそと家を出る。徒競争の真似などしなから学校に向かう生徒たちの表情は、晴れ晴れと明るい。娯楽が殆どなかった当時の鵠沼は、学校行事の運動会と学芸会、それに神明様のお祭りを加えて、三大行事といえるものであった。

学校に着くと、校庭は、きれいに清掃された上に、徒競争用に引かれた石灰の白線が眩しく光っており、村人たちの中には、速くもござや筵を持参して良い席を確保している者もある。一方、先生方は、上から下まで白ずくめの体操服姿で、鈴木先生、桜本先生、関根先生、八幡先生等、せわしげに走り回り、綱引きの綱を引っ張り出したり、小道具を揃えたり「おーい 、 かけやを持ってきてくれ」と言って杭打ちの補強をしたりしていた。玄関の前には、大テントが張られ、安田先生や島村先生が賞品となるノートや鉛筆を机の上に整理するのに忙しく、向かって左隣には、活動写真館専属の楽隊が、トランペットやらサックスやらドラムなどの調整に賑やかな音を立てている。（この楽隊は、小四の頃、坂倉校長が着任されてから、レコード音楽をスピーカーで流すようになってからすがたを消してしまったが、我々には寂しく感じたものだ）また、二百米コースの外側の校門近くには、まるで縁日のように屋台店が繰り出して、店開きの準備を勧めている。風船屋、風車（かざぐるま）屋、アイスクリーム屋の小父さんたちは、子供らに冗談を言って喜ばせ少しでも多く買わせようと逞しい商魂を覗かせている。貴賓席には、高松父兄会長、警察署長の顔も見えた。

カラン、カラン、カラン・・・小使さんが鐘を鳴らした。いよいよ運動会の開始である朝礼台前に全員集合、土方校長の挨拶、高松父兄会長祝辞の後全校体操、終わって行事が始まる。私たちが一年の時は、おゆうぎの出し物は、男子が「ヒコーキ」楽隊のジンタ演奏を受けて、元気よく「アーレ、アレ、アレ上がるヒーコーオキが」と歌いながら、右手を空を指さしながらだんだん高く上げていくのだが、誰だったか、あまり元気よく手を振り上げたので後向きにひっくり返り、観客が思わずどっと笑ったことが思い出される。女子は「ちゅんちゅく、ちゅんちゅく雀の子、生まれたときは丸裸、耳も聞こえず目も見えず頭振り振りちゅんちゅくちゅう」と歌いながら踊っていたが、この時の楽隊の伴奏は何となく物悲しく響き、小さなおかっぱ頭の女の子らの可憐さが、観客の老婆に、「あーら可愛いわねーえ」と思わず嘆声を洩らさせていた。八幡先生は、当時三年生の担任であったが、出し物は騎馬戦で、紅白に分かれ出撃の前に楽隊に合わせて歌った軍歌「敵は幾万ありとても・・・」のうたがやけに勇壮に聞こえ、歌が終わって「ウワーッ」と歓声を上げて突撃し、乱戦になるのを、息を呑み、手に汗握って、「羨ましいな、僕たちも上級生になったらやつてもらいたいな」ながら見つめていた。当時は、男子は勇ましいものへのあこがれが強く、運動会には、必ず数名の在郷軍人参加の軍事教練があった。教練といっても後から考えれば、「回れ右」を間違えたり、あまり、しまりのあるものではなかたったが、それでも、脚絆を巻いて、三八式歩兵銃を担いで歩く姿は、すごくかっこよく見えた物だ。特に、散開して、我々の眼前で、空砲を、「ダダーン」と打って突撃すると、男子の中には、「やったー」とか「やったりこ一番」などと叫んで熱狂する者もいた。

運動会のメインイベントといえるものは、何といっても部落対抗リレーであった。私は堀川地区であったが、当時の鵠沼は部落意識の強い所が多かった。特に、宮の前地区は団結が強く、私たちは、当時、宮の前に対しては、或種の恐怖心すら持っていた。さて、このリレーは、一年生から高等科二年まで、男女別に各一名ずつ計八名が選手となって、リレーするのであるが、各部落の熱狂的な声援を受け、部落の栄誉を小さな肩に乗せ、顔をくしゃくしゃにして懸命に走っていた。ある選手は、終わった後で、上級生から、「ちぇっ、抜かされやがってよう」と私の目の前で毒付かれ、土手の桜の木の下で泣いていた。我々が低学年の頃は、速かったのは、大橋慶助、若林孝、渡辺政治、小林美代子、宮沢タ

ケ等の諸君だったが、学年が進むと分布が多少入れ代わり、篠崎良三郎、山田三郎、山森徳男、転校生の田口弘子、雨宮貞子等の諸君が加わった。当時の上級生では、宮の前の土方兄弟、堀川の「ケリョーサマのトーサン」こと渡辺兄弟、その他湘南中学に行った梨ノ木某、女子では堀川の浅場イーちゃんが断然速く、数名をゴボー抜きにした時には、堀川の連中は、「イーちゃーん、イーちやーん」と熱狂的な大合唱を送った。

昼休みは三々五々家族と共に重箱弁当に舌鼓を打つ者が多かった。まことにのんびりした田舎情緒豊かなもので、食べ終わると、こんな時だけ、親から三銭とか五銭、多い人は十銭位の小遣いを貰い、屋台店を回り歩いて「ほーら、こんなに盛って一銭だよ。たった一銭だ。さあ、買った。買った」と呼び込むアイスクリーム屋の小父さんの声につられピエロ帽の上に盛られたアイスクリームを、大事そうに一口舐めてはニヤニャーッと笑ってまるで宝物でも持っているかのような顔をしていた女の子があり、それを羨ましそうに眺めていた自分に、はっと気が付いたこともあった。現代の子供たちにはピンとこないことと思うが、当時は貧乏国日本として自他共に認めていた時代なので、このような光景は、その一つの象徴でもあった。これを、現在の物質的豊かさと比較すれば、誠に今昔の感に堪えないものがある。然しながら、物質的豊かさは、日本に何を与えたであろうか。大企業の営利追求の過当競争は、乱開発による自然破壊を一挙に押し進め、学校教育の場は、本音と建前を上手に使い分ける教師が著しく増加したため、血が通う教育が大きく後退し生活指導に大きな障害を生じさせている。また、親子関係も、子供に対して手をかけず、安直に金をかけ口をかける親が増加の一途となって、これらが、最も大切な人間関係における心のふれ合いを砂漠化の方向に追いやっていることは、学童の自殺、いじめの構造多発の形になって現れている。ともあれ、貧乏国だった当時の方が人間味溢れた先生は、豊かな現代より、遙かに多かったことは事実であり、子供達も、陰湿な子は現代よりも遙かに少なかった。これは、貧乏なるが故に有難味が分かった故であろうか。　　余談はさておき、運動会のフィナーレは、全校生徒が校歌を歌いながらの大行進となる校旗を持った最上級生を先頭に、男子が高等科二年、一年、小六より小一と続き、その後に女子かついてくるという形で、二百米のトラックを行進する。この歌は、まだ耳の底にその一部か残っているので、思い出すまゝに書いてみたが、歌詞を全部御存知の方は、是非御一

報下さい。

一、天龍眠る富士の嶺　　地球嘯く相模灘

　　秀麗ここに地を占めて　　その名も床し鵠沼校

二、一度（ひとたび）雲霧蒸し湧かば　　昇天すてふ咬龍も

　　？さまたならぬ束の間を　　潜むか床しこの池に

三、砥上ケ原野常磐木や　　千里寄せ来る蒼浪も

・・・・・・・・

・・・・・・・・　　永久の光を鏡にて　　学び励まん諸共に

歌声は、或は高く或は低く、漸く夕靄に包まれんとする校庭から、長く余韻を引いて、松林の中に、畠の稲むらに，はたまた農家の藁葺屋根へと吸い込まれていく。森田さんの家の松の木だろうか、たむろしていた烏が「カァー、カァー」と鳴いている。靄を通して農村独特の干燥藷のような甘い香りがぷーんと快く私の鼻をくすぐる。見物に来た村人たちは、莫蓙や筵をたたんで片手に下げ、三々五々ひき上げ始めた。目やにをためた老婆が目をしょぼつかせ乍ら、「ふんとに面白かったよう」と呟いて、曲がった腰のまま、杖にすがってよちよちと、三留さんの側へと歩いていったのが印象的だった。女の子が数名手をつないで歌いはじめた。ユーヤケコーヤーケーデ　ヒーガークーレーテー　ヤーマーノー　オーテーラノ　カーネーガヘナールー　　オーテテツーナーイデ　ミナカエロー

以下次号につづく

昭和一桁時代

若尾　肇

堀川という所

当時の鵠沼は、東海岸、西海岸、堀川、石上、花沢町、原、刈田、大東、中東、宿庭、上村、宮の前、等の小部落の集合で、東海岸は別荘地帯、他は大半が農村地帯であった。私が育つた堀川は最も西側に位置し、引地川を隔てて辻堂に接した農村だった。引地川は、現在より辻堂よりを蛇行して流れ、川幅も狭く、両岸は雑草が水面を覆うように生い茂っていて、雨の日は茶色く濁った水が渦を巻いて流れる不気味な川であった。

大雨には氾濫して、堀川側の田を一大湖水と化し、辻堂に行く一本道も水没したので、村の西端にあった竹内さんから数十米先で、田植え用の田船を出して人を渡していた。

川には木の橋が掛かっており、橋を渡ると上り坂となった砂地の山で、両側は鬱蒼とした松林が遠くまで続いていて、夜道などは幽霊や山姥等が襲って来そうなムードがあり、兎や野狐も棲息していた。かわうそが棲んでいるという人もいたが、確認はしていない。

橋のたもとには民家は二軒しかなく、同級生の相沢ふみさんと相沢久子さんが、そこから通学していた。相沢さんの家は土木屋さんで、当時の町長の一木与十郎氏が、引地川を大改修して現在の川にしたとき、その工事を請け負ったと聞いている。（昭和６年頃か）

相沢さんは、何故か明治館と呼ばれいたが、明治時代は旅館だったのか。久子さんの弟の兼雄（？）さんが、引地川の増水時、橋から転落し、下流の砂山の下で兄さんに発見され、九死に一生を得たが、落ちた瞬間失神して固く口を結んだため、水を一滴も飲まずに助かったという。砂山というのは、松林の中でこの部分だけ植物のまったくない砂の斜面が川岸迄下りていて、我々はよく探検気分でここへ来て、お山の大将ごっこに興じたり、川辺で湧き水を飲んだりしたものである。

ふみさんの兄さんに、私より二年上のマツちゃん（松蔵）という人がいた。彼は一般の子供と一味違った大人びた冷静さを持ち、学業も抜群だったようで、私もよく一緒に遊んでもらった。高等小学校に行き早世したが、東大に入る頭脳があっただけに惜しまれる。

竹内さんから相沢さんまでは約二百米位あったか、辻堂に抜ける細い道があり

両側は田んぼで、その中央を小川が横切っていた。この小川は、岸辺にはすみれ、たんぽぽ、つくしんぼう、はこべなどが可憐な花を咲かせ、夏はきりぎりす、くつわ虫、松虫、こおろぎなどが、草むらで華麗なオーケストラを奏でるなかを蛍が乱舞し、水の中には泥鰌、めだか、鮒、なまず、そうめんこ（鰻の子）等の他、水すまし、げんごろう、あめんぼう、やご、たがめ等が我が世の春を謳歌していた。また夏の夕暮れにこの付近に佇んでいると、塒に向かう前の夕食に、羽虫を食べる為であろうか、おんじよ（やんま）の大群が夕焼空を覆って南に北に飛び交っていた。

この小川から東へ数十米の所に、竹内さんの家が見られ、更に百米程東に「辻」と呼ばれる十字路があり、五月の凧揚げや、一月の「だんご焼き」（どんど焼きのこと）で、村の衆の顔合わせの場所の一つでもあった。その北西の角は、葉山又兵衛（通称マタベさん、と言い現市長葉山俊氏の祖父）のお屋敷の石垣になっていて、北東の角は畑であったのが、間も無くマタベさんの長女八重子さんが高井さんと結婚して新居が建てられた。

南側は畑と野原で、夏などは褌一つでこの畑や野原の間を、姦しいきりぎりすの鳴き声を聞き、無数のばったが一斉に逃げ散るのを見ながら、海水浴に行ったものだ。今では、こんな思い出に浸れる人もごく僅かである。

辻を北に向かうと、左手にはマタベさんのお屋敷の大きな正門があり、石垣は更に続いて、石の間には、平家蟹が大将面をして、泡を吹きながら人間をうさん臭そうに見詰めていた。石垣の内側は植え込みになっており道寄りには椎の木が沢山植えてあった。石垣の終わる所には用心井戸があって、誰が投げ込んだのか、鮒や金魚が泳いでいた。

葉山さんのお屋敷の北側は、私の家の敷地になっていて、道端には珊瑚樹がずらりと植えてあった。この珊瑚樹の実は、真っ赤な卵形の小さい玉なので、我々はよく竹鉄砲の弾玉にして遊んだものである。この生垣の内側に私の父の温室があり、冬はスイトピー、夏はトマトを栽培していた。

東側には、板橋のウノさんの家があり、ウノさんは無愛想だったが、いつもにこにこ感じの良かったお婆さんと、アサちゃん、おシッちゃん、（彼女も頭が良く勉強も良くできたが、また良く遊び、私が２～３才の頃、私の家に友達と遊びに来てママゴト遊びの仲間にされた。）の４人暮らしだったようだ。

その東隣りは大工の金作さん夫婦が住んでおり、人の良い温厚な夫婦だった。その後、トキちゃん、カッちゃん、セージちゃん達が次々生まれた。

ウノさんの北側は平本さんの家で、板橋さんと仲良しのお婆さんの他、アサち

ゃんと仲良しのおじさん、オシッちゃんと仲良しのミサちゃんがいて、それぞれおおらかな付き合をしていた。その東に板橋さんの本家？があって、ノブちゃんイサムさん、ヨッちゃん等が私の遊び相手になってくれた。

挨拶の仕方も、至って悠長なもので、私の三輪車が要らなくなったので、母がヨッちゃんに回してあげたら、「マアーヨーアリガトゴゼーマスヨー、ホントニヨー、オデージンダカラヨー、ソレコサヨー。」と誠に丁寧なお礼の言葉が返ってくる。（実際は私の家の方がずっと貧乏であった。）

私の家の北側は、近藤さんのお屋敷で、ここのお婆あさんは、私の祖母と話をするのが好きだったとみえてよく話に来ていた。生け花の先生もしていたようだ

近藤さんから更に北に行くと、左手に田中佐次郎さんの家が一軒あるきりで、その先は西側が小高い松林、東側は一段低い畑て、途中こんもりした藪の中にお墓があり、民家迄はかなりの距離に感じた。

ここの夜道は、今のような外灯は無く、提灯のほの暗い光が頼りだけに、お墓の前に来ると目をつむって駈け抜けたものだ。

更に北に行くと「原」という地区になり、床屋の小早川さんと、通称「タイワン店」という酒屋兼煙草、雑貨屋さんの前に出るとほっとした。私が一箱七銭のゴールデン・バットを買うと品の良いお婆さんが、「ボンさんには、今日は何をあげましょうか。」と言いながら、飴玉やキャラメルのばらを駄賃にくれたのが今も懐かしく思い出される。

さて、堀川には浅　姓が比較的多く　「アラヤ、ニイヤ、シンヤ」の誰それと呼んでいたが、分家して独立した人が家を建て、新家、または新屋、の読み方を次々変えていったためであろうか。他に懐かしい名は、渡辺、相沢、板橋、八木竹内、番場、赤羽、田代、宮崎(精米所で通称「カシャ」といった外、「カゴヤ」と呼ばれる家もあった)、田中、山口、山本等の名がある。

通称「ギンさん」と呼ばれた渡辺さんの隣には用水池があり、食用蛙が沢山いて「グオ-グオ-」と不気味な声で鳴いていた。

この池と道を隔てて「オメカさん」と呼ばれる店があり、鰻やら駄菓子やらを売っていたが、特に駄菓子で懐かしいものは、三角の紙袋に赤い印刷をした南京豆蛤の殻の中に粉菓子をいれて紙テープの帯封をしたもの、蝋紙のチューブに水飴が入っていて、チューブをしごくと飴が口に入るもの、ばらのキャラメルの裏に万国旗を印刷したボール紙が入っていて、何枚かためると景品が貰えるもの等である。この店は、母と息子の二人暮らしであったようだが、ある日、母と海岸にいく途中、その店の前を通りかかると小母さんが手拭を包帯のように頭に巻いて

いたので、母が「どうしたの？」と聞くと「いえね、○○さんがうちの子の悪口を言ったんで、どんなとこがわりいか、聞きに言ったんですよ。そしたらあべこべに殴られちまったんですよ。」といった。この息子は私より二つ年上だったが、気が弱くお人好しだったので、よく苛められては泣かされていた。そんな息子に異常な愛情を持っていた母親は、その都度、怒鳴り込みに行ったらしい。よく悪童連が、

「屁えひったの、オメーカー」と囃立てていたが、「オメカ」というのはお妾さんのことだったようで、当時、妾の子は庶子として差別され、総理大臣近衛さんの愛妾ですら、表玄関から入れて貰えず、周囲から冷たい目で見られ誠に気の毒であった。

でも、今の陰湿な苛めとは違い、本人が泣き出したら、それ以上のことはしなかった。

堀川は、また地域によって、西っちょ、東っちょ、なんや、の三地区に別れていた。

私は西っちょに属していた。東っちょには村人に馴染み深い尼寺（このお寺のことは、稿を改めて書く）があり、その東側はやや小高い松林であったが、砂地のためか、太い根が露出していて、子供がトンネルのように下をくぐったり、腰掛て手足をぶらぶらさせたりできる格好の遊び場であった。（その頃は未だ小田急は通っていなかった。）

オトメさんの家

私の家は、東側が表通り、西側が裏通りと、二本の道に挟まれていたが、西側の道路を隔てて、葉山さんの地所が、約千坪（？）位あって、植木類が雑然と植えてあったった。

これに接して、南側にはお墓があり、松の木と蜘蛛の巣だらけの薮に囲まれ、人玉を見たという人もあり、昼でも暗い感じの薄気味悪いお墓であった。

このお墓の北側に接して、道路と同じ高さまでコの字型にえぐられた葉山さんの土地に、「オトメ」さんという老婆が夫婦で住んでいた。

今でいう生活保護所帯であったか、拾い集めてきた丸太や、切り倒した松の木を柱にして、ブリキ缶や焼けトタンで屋根を葺き、りんご箱などの寄せ集めの木で木戸を作り、煤だらけのランプが天井からぶら下がっていた。

オトメさんは、按摩をしており、目脂だらけの顔で笛を吹きながら、近所を流していた。あまり流行ってはいなかったが、母が時々呼んだことがある。

彼女は大の猫好きで、捨て猫を拾ってきては飼つてやり、家の中には多くの猫

がニャゴニャゴ鳴いていた。時には散歩に連れ出したりもしていた。とくに「ていこ」という名の猫を可愛がっていたようで、「てーこ、てこ、てこ」という呼び声がよく聞こえたので、父はこの家のことを「ていこ」と呼んでいた。

この二人はよく夫婦喧嘩をした。亭主の怒鳴る声は私の家にも筒抜けに聞こえた。内容はさっぱりわからなかったが、「ばーか、ばーか」の連続で、オトメさんの方は何を言われても「いいじゃねーの」とお説教などどこ吹く風という顔をしている。亭主はその度に、「ばーか」といきりたつ。そのうちオトメさんが居眠りをこっくり始めると喧嘩はちょんになる。という寸法だった。ある時、私が道端で遊んでいると、オトメさんの亭主が一通の手紙を持ってきて、私より六年上級で中学一年だった山本一麿さんに、「役場からこんなもんが来たけど、字が読めねえから読んでくんねえか」と頼みに来た。中身は

「O月△日、金五十銭と醤油一升、みそ三百匁・・・、配給するから、役場に取りに来い」というもので、

一麿さんは、読んだ後、「只でくれるそうですよ」と「只」を数回強調して説明していた。当時も簡単な福祉政策はあったようだ。

オトメさんの家の裏には大きな一本松が聳えていた。太い幹の上に、傘のような枝をつけ、烏の溜り場であったが、ここの烏が一斉に異様な声で「かあー、かあー」と泣くと、決まってどこかの家で不幸があった。それゆえ、ここの烏の声で「烏泣きがわりいが、誰が死んだんだべ」などと言いあっていた。

堰（せき）

引地川が現在のようになってから、上流の方に潅漑用の堰ができコンクリートの橋が掛かった。前記の小川は、この堰より少し上手から別れていた。

上流に向かって右手は田や畑、左手は小高い松林が川に沿って長く続いており、手拭を姉さん被りした子供たちが、背中に「背負子」（しょいこ）を載せ、熊手を持って枯れた松葉をかき集め（焚き付けにするため）、背負い子に背丈より高く山盛りに積んで家路に向かう姿が、一つの風物詩でもあった。

また、この山は松露がたくさん取れたが、当時は少しも珍しいものではなかった。

引地川の水は、いつも茶色に濁っていて余れきりいではなかったが、堰の上手は水深が深くなり、子供がプール変わりに水遊びを楽しんだものである。

堰は、ごうごうと滝のような音を立ててコンクリートの底に落下し、勢いよく流れていく。落下点の裏側には無数の川えびが仕切り板にへばり付いて体を休め、下には「そうめんこ」が無数に泳いでいた。

ずつと上流には大和醸造（今の三樂酒造）があって、ここから定期的に酒粕を流すと、大きな鮒や鯉などの魚が酔ってぶかぶか流れてくることもあった。

毎年九月には、堰が放流されたが、その時は大勢の人が、網や箕をもって集まり、流されてくる鯉や鰻や鮒などを捕まえ、大きさを競いあったりして、賑わったものである。目の下一尺ぐらいの鯉もかなり取れていた。

当時の風俗

貧乏人の子沢山、という言葉があるが、当時の農家は、三人以上の兄弟姉妹のあるところが多かった。

そこで兄や姉は、子守をするのが義務になっていた。弟や妹を背負い、その上にねんねこ半纏を着て、縄飛びや鬼ごっこや鞠つなどをしたものである。特に鬼ごっこのときは本人は夢中になって逃げるので、背中の赤ん坊は、首が千切れはしないかと心配されるほど前後左右にゆれ動いていた。

板橋の勇さんがこの姿をしてヨッちゃんをおぶっていた時、パンツもおむつもしていなかったので、道に大きなウンコを落した。「あっ、ウンコした。」誰かが言うと、勇さんは恥ずかしかったのか「だめじゃねえか」と言うなり、思いっきりヨッちゃんの尻をつねった。かなり痛かっただろう、ヨッちゃんは大声で「うえーん」と泣き出したが、これは本人に責任がないだけに可哀想であった。

野良で働いているとき、子守がいないものの中には、畑の隅の松の木などに赤ん坊を帯びでしばっておく人もいた。赤ん坊は炎天の中で、犬の子さながらに木の回りを這い回っていた。

そのように荒っぽく育てられたので、当時の農家の子供達は、早死にする者もいたが、無菌状態で育つ今の子供たちより頑健であった。

農家の人が田畑に行く時は、裸足の場合が多く、時には地下足袋をしていた。親父さんは牛を引き、家族は牛車に腰を掛けて、野良に行く光景もよく見かけた。雨の日は、必ず蓑（みの）をつけて出掛けたものである。

田んぼ仕事をした帰りには、足のふくらはぎから血を流していた人も多く、これは蛭に血を吸われたからで、中には蛭が付いたまま歩いている人もいた。蛭は血を十分吸うと丸くなって下に落ちる。贅沢に慣れた今の人には耐えられぬであろうが、当時の人たちはこんなことには無頓着で、蛭を足から剥がしていとも無造作に投げ捨てる人もいた。

お　こ　じ　ょ

農家の人々が、野良で働いているとき、小休止の時間にお茶が入る。このことを「おこじょ」と言っていたが、「お小食」が訛ったものであろうか。

そこで、野良に出掛ける家族は、手に手にやかんや食物を風呂敷に包んで、手分けして持っていった。

「おこじょ」の中身は、沢庵、白菜の漬け物、芋団子等で、畑の中で家族団欒の一時であった。菓子類は滅多になかった。

芋　団　子

芋団子は薩摩芋の粉に熱湯をかけて良く練り、細長く千切って片手で強く握ったものを蒸すのだが、指の跡がくっきりと横に付いており、農家の人が作ったものは黒光して、実においしかった。勤め人等の家庭で作っても茶色になってしまい、農家の味は出なかった。これは芋の粉を練る時、熱湯でないと黒光色にならず、農家の人は手の皮が厚く逞しかったので、一般の人より熱い湯に耐えられたからであろう。

こ　が　し

麦を煎って粉に挽いたもので、芋団子とともに、当時の農家の子供たちのおやつの一つであつた。麦粉菓子を省略して「こがし」と言ったのであろう。

これに砂糖を入れて混合させ、新聞紙や半紙に包んで、顔を突っ込むようにして舐めるのだが、これがなかなかおいしかった。

だが、鼻の頭や額あるいは口の回りなどに粉が付いたり、欲張って多量に口に含むと、咳をしたり、笑ったりしたとき、口の中の粉が全部回りに飛び散ってしまうので、誰かが口一杯に含むと、回りのものが寄ってたかって笑わせようとしたものである。

竹　の　子　の　皮

現在は地方に行かないと見られないのが、これを利用したおやつである。当時の農家のおやつは、殆ど自家製で賄っていた。それだけ金を大切に扱い無駄遣いをしないような心がけが強かった。

竹の子の皮に梅干としその葉を入れ、二つ折りにした後、端の方を曲げて三角形のおむすび状にして、頂点のところを手で持ち、底辺のところを舐めるのである。すると底辺の両端から酢っぱい汁が口の中にちびちび流れ込み、両頬から唾がにじみ出てくる。しその葉の色が竹の皮に染みこんでいき、次第に赤みを帯びてきて、やがて濃い紫に変わっていくのが楽しみであった。食間の遊びであったから、今にして思えば胃腸の消化を助けた合理的なものであったといえよう。特に女子はこれを好んでいたようである。

愛　読　書

農家の縁側に無造作に置いてあったのは、「キング」「講談倶楽部」「婦人倶

楽部」などである。

当時の農家の人々は、時代劇や仁侠ものを好む人が多かった。「宮本武蔵」「荒木又右衛門」「後藤又兵衛」「塙団右衛門」「清水次郎長」「国定忠治」「赤穂浪士」「瞼の母」など、単純な勧善懲悪や人情物を好む人が多かった。

これは、当時の人々の生活苦が、無意識に政治に対する不満の、ささやかな捌け口として、このような形として表れていたのであろう。

現代においても、「水戸黄門」「必殺シリーズ」「江戸を斬る」「大岡越前」「遠山の金さん」等がテレビでロングランを続けているのと酷似している。健全な政治が行われていない証（あかし）ともいえよう。

農　家　の　作　り

農家の作りは殆ど同じであった。すなわち母屋は東向きに建てられていて、前は広い庭になっており、麦打ちや稲扱ぎ（いねこき）、餅つき等の作業場と子供の遊び場を兼ね、隅には苗床もあった。庭の周囲には椿、棕櫚の木、桜、珊瑚樹、もちの木、猿すべり、楓、松等が植えられ、一寸した花壇を作っている家もあった。

玄関は東側の南端にあり、入ると土間になっていて、左側は納屋兼物置、右は住居で上がりかまちがあって接客室、西隣はいろり付きの食堂、奥もこれらに続いて二間に仕切られていた。土間の裏口を西側に出ると、釣瓶井戸と流しがあり、何となくじめじめしたところが多かった。

また、けやきの大木のある農家もかなりあったが、夏になると油蝉、みんみん蝉、くま蝉、つくつくほうし、ひぐらしなどの蝉類が賑やかに合唱していた。くぬぎの木には、かぶとむし、くわがた、黄金虫、あげは蝶などが仲良く体を寄せあって、木から出る汁を吸っていた。黄金虫は極めて種類が多く、「イジンカナ」「シオッカナ」「クロッカナ」などと呼んでいたが、「イジンカナ」というのはやや角張った体に、薄緑色のメタリック塗装したような感じで、何となく異人さんのイメージガあったから「異人かなぶん」のつもりでこう呼んだのであろう。「シオツカナ」はもっと丸みをもち、薄茶色の背中に塩を振り撒いたような感じであり、捕まえると、背中を「きゅうきゅう」鳴らしていた。「クロッカナ」は、形は「イジンカナ」と同じであったが、背中が真っ黒に光る漆のような艶があったのでこう呼んでいた。

いちじくの木によく見られたのは、「かみきりむし」である。これも種類が多く大小様々であったが、捕まえて触覚を持つと首と背中をこすり合わせて「きり、きり」と鳴くのが面白かったが、顎の力が強く、噛まれると非常に痛かった。

ひいらぎに付く「えぼたむし」と呼んでいた芋虫は、触れると橙色をした角をだし、鼻をつまみたくなるような嫌な臭いがした。

ともあれ昔は都会地近くでさえ、このように自然との共存生活が有ったのである。

尼　寺　さ　ん

現在では大きな伽藍を持ったお寺で、「本真寺」となっているが、当時は「慈教庵」と称して、民家風の、本堂と庫裏が一体になった質素なものであった。

このお寺は、日本の百上人に数えられている唯一人の尼僧、颯田本真尼が、夢枕に仏様のお告げを受け、現在地にお寺を建立したもので地元の人々の憩いの場でもあった。

それゆえ、地元の人とのつながりは深く、行事も多かった。その代表的なものに花祭りがあった。

四月八日は、町内の子供達が集まって、学芸会が有り、歌を歌う者、落語「じゅげむ」を一生懸命演じる者、上級生は「楠公桜井の別れ」を劇で演じたりして、立錐の余地もない程の見物客（町内の大人や老人たち）からやんやの喝采を受けていた。終わって甘茶や菓子を御馳走になり、福引などがあって村人には楽しい一時であった。

この花祭りには、後に張り子の白象を引くことになり、象の上に載せるお釈迦様をどうするかという時、私が鎌倉遠足（小学校四年生）の時に買った大仏様（五銭と十銭と二通りあって、私は奮発して十銭のを買ってあった）があったので、それを差し上げたところそれが象の背に載せられた。

子供達が引き綱を引き、尼さんの先導で象を引きながら海岸道りに差しかかると、一人の老婆が道端に土下座して「ありがたや、ナンマイダブ、ナンマイダブ」と涙を流しながら拝んでいたのが強く印象に残っている。

当時の人々は、このような素朴な心のぬくもりというものを持ち合わせていた。

経済成長に酔い痴れ、企業利益を前提とした社会機構が、人々から素朴さを失わしめ、中央に立つ人程、足るを知らざる人間になり下がると同時に、他人の痛みを解し得ぬ者に作り替えてしまったのである。

終わり。

「鵠沼」第６６号
平成５年１月１２日発行

鵠沼の思い出

若尾　肇

ご注意：本紙（機関紙）の文章を引用される方は、必ず出典を明記して下さい。

編集・発行　　鵠沼を語る会

鵠　沼　公　民　館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34